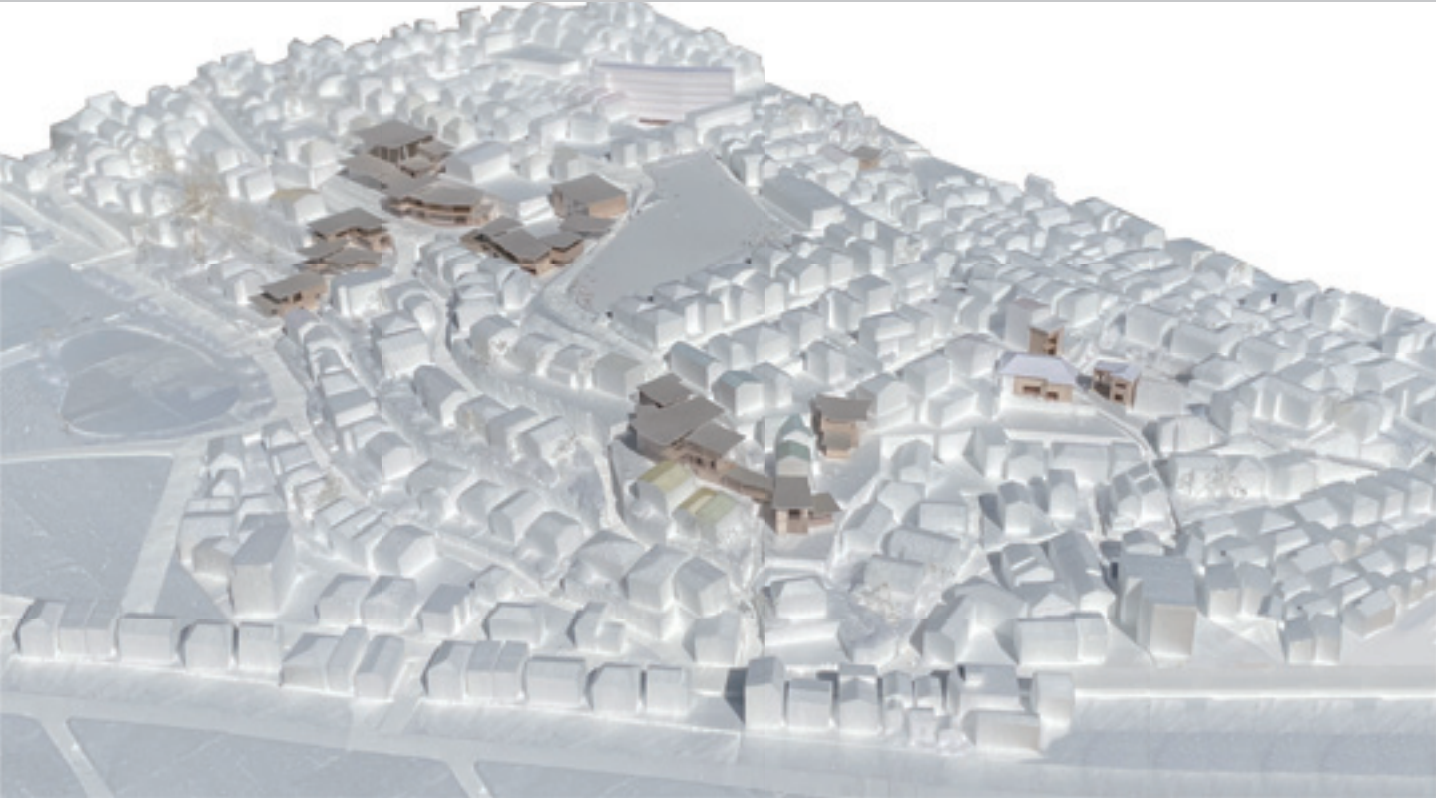
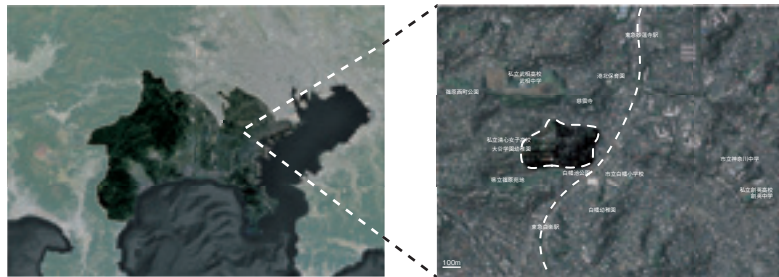


坂を登りだしたら我が家
丘を一つの建築にする

藤澤太郎



01- 敷地：横浜市港北区 篠原地区 篠原台町東の丘



篠原地区「横浜文化名鑑」(横浜市教育委員会 1953 年)の「文化関係者名簿」を見ると港北区は 66 人、そのうち 42% にあたる 28 人が篠原町に住んでおり、閑静な住宅が建ち並んでいた。
元県知事公舎(庭が県立篠原苑地として公園化)、武相学園(現武相中高校:創設者 石野瑛 篠原台町住人)、横浜ドレス学院(現清心女子高校) ⇒丘の暮らしは文化的なことであった。関東大震災の後、横浜や東京の市街地からは政界、財界、官界の有力者、著名人が数多く移り住む。

横浜の谷戸地形

起伏陰影図

下末吉海進により緩やかな丘と丘が連続的に応答。

丘→住宅 谷→インフラ

谷地に鉄道などの早い交通インフラが通り、丘には住宅が建つ。

群島のような丘地形

起伏陰影図

谷戸地形が作り出す複数の丘がダラダラと続く。丘に重なるように行政区が分かれている。

行政区区域図

丘の輪郭を捉える

階段と道の図

坂の入り口は階段が多く、歩行者優先の丘。

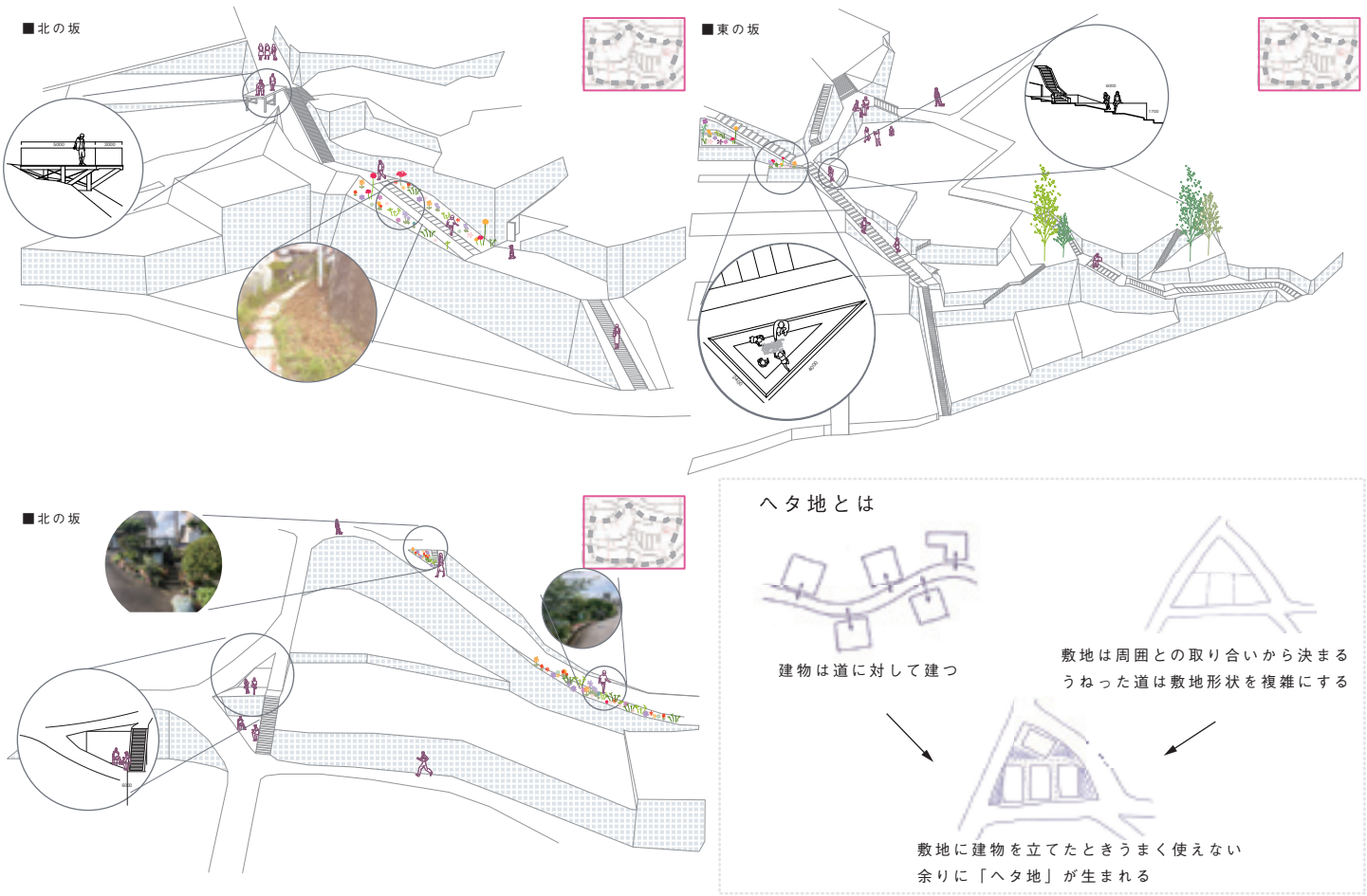
緑地の図

崖線緑地により、緑が丘の輪郭を描く

群島のような丘地形に対して、丘を一つの建築にすると
今まで住むという単機能で構成されていた風景を
それぞれの丘が色がつくように変えることが可能なのではないかと

02- 丘の坂道の空間的魅力

丘⇄坂道⇄ヘタ地という空間のスケールの横断のなかで
ヘタ地と坂が変わることでこそ丘の風景を変える空間的な可能性があるのではないかと感じた。



■ヘタ地が居場所となる

入り組んだ坂道と矩形的の家によって作り出されたヘタ地が坂に沿って連続的に存在している。高低差が生み出すヒューマンスケールなヘタ地は坂の途中の居場所となる。

■誰でも通れるローカルな坂道

袋小路

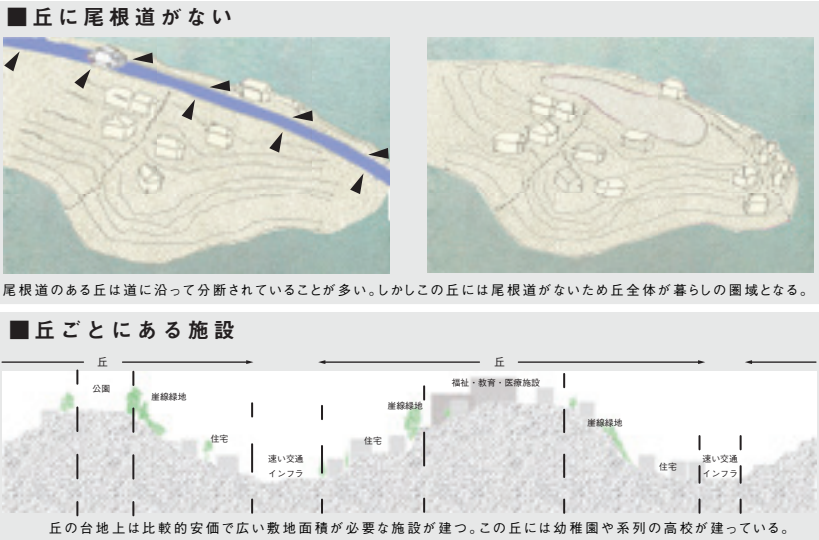
坂道は両側の家に対して袋小路のような道のローカルさを有する。一方で麓→頂上→麓と通り抜けることが可能なため、アーケードのようなオープンな公共性を持つ。

丘の坂道

複数の坂が頂上で合流する

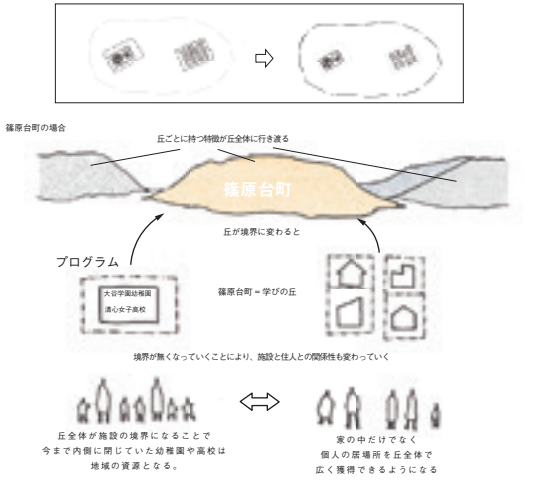
03- 提案：丘を一つの建築にする

敷地の可能性



敷地境界を丘に変える

誰もが使う坂道に建築を考慮することで、施設や家の境界をなくし丘全体が一つの建築になるように設計する。



マスタープラン 学びの丘

丘全体で学校・幼稚園教育は勿論、高いや園芸・本を通すことで、すべての年代の人が学べるようにする。

ショップ

もともと共用部を坂道として開放していたマンションを高いを学ぶ場として回収する。高低差を繋ぐ際にできた踊り場の面したマンションの室をショップにリノベーション。踊り場側の壁をセットバックし手すりをなくすることで、マンションと地形を一体化させる。

高校・体育館

ギャラリー
ホール

地形を取り込むように、隣壁が壁になったり階段で通り抜けられるよう設計した。坂道状のヘタ地と呼応するように引き込む箇所をつくることで、坂道すらも取り込む。

コミュニティガーデン

造成されていない空地にコミュニティガーデンと作業小屋を考える。緑との関わりを学ぶ。

丘の書架

3軒の集合住宅に対するリノベーション。高校、幼稚園、丘の住人の本を集め丘の書架とすることで、それぞれの学びを共有。

幼稚園、シェアキッチン

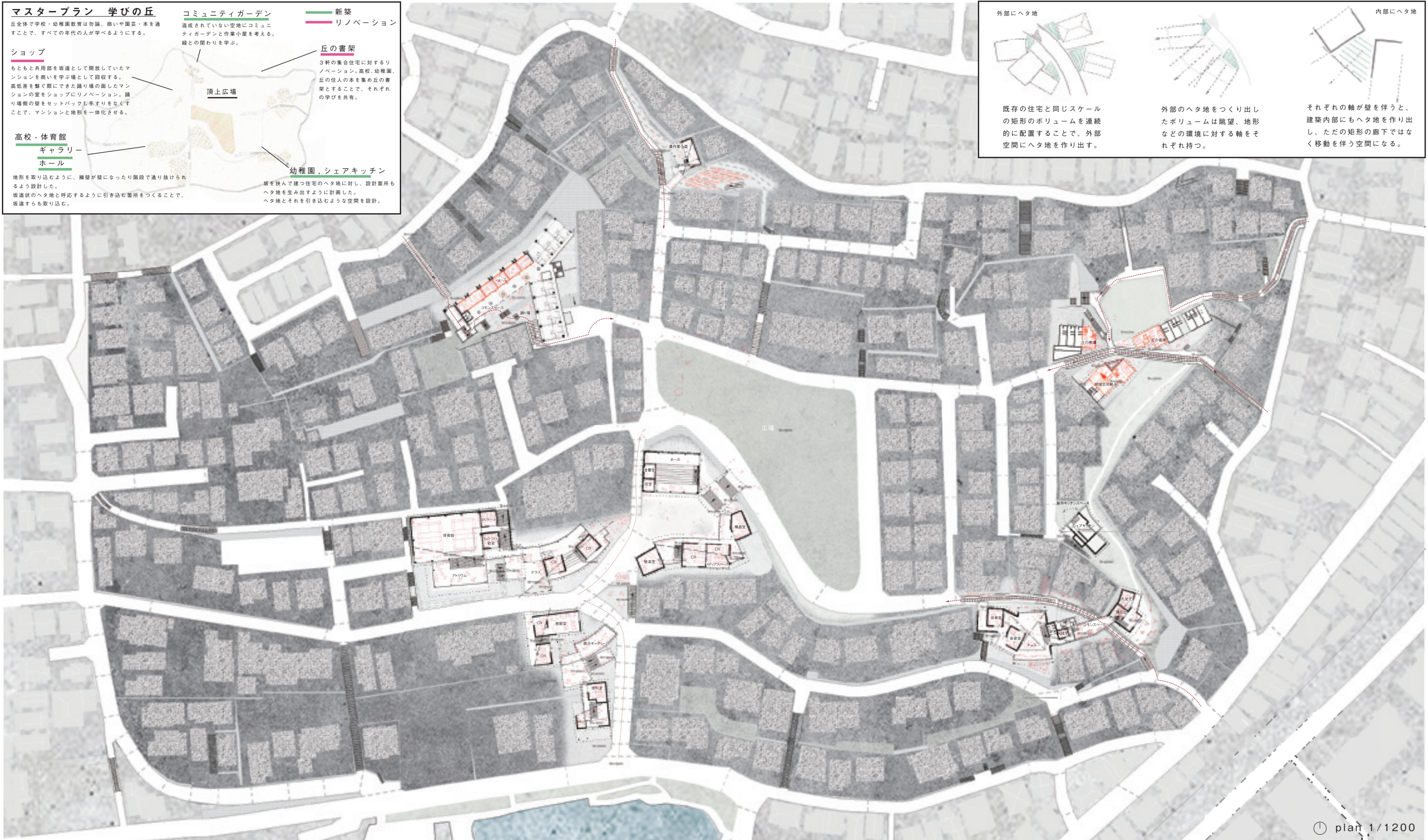
坂を挟んで建つ住宅のヘタ地に対し、設計箇所もヘタ地を生み出すように計画した。ヘタ地とそれを引き込むような空間を設計。

外部にヘタ地

既存の住宅と同じスケールの矩形のボリュームを連続的に配置することで、外部空間にヘタ地を作り出す。

内部にヘタ地

それぞれの軸が壁を伴うと、建築内部にもヘタ地を作り出し、ただの矩形の廊下ではなく移動を伴う空間になる。



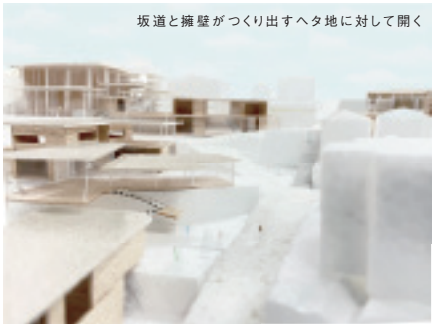
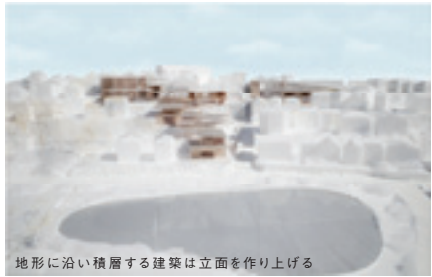


高校

丘の頂上に向かう唯一の車道である坂道。
この坂道に対する建築を以下のように変える。

- ①坂のヘタ地に対して建築が開くこと
- ②地形を繋ぐようにボリュームを積層

ヘタ地を取り込み坂に対して開くことや建築の内部動線が坂のインフラを担うことで建築自体（施設）の境界性を無くすことを考えた。

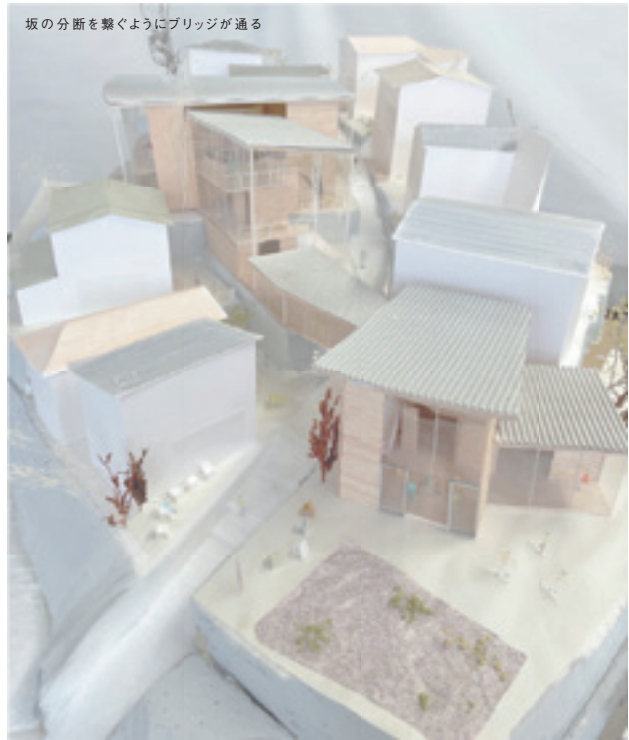
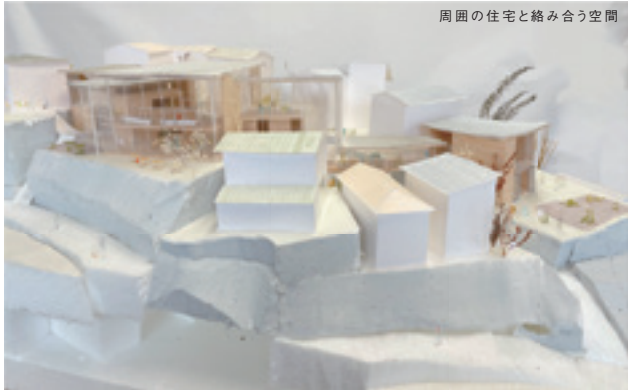


幼稚園

一本のまま、枝分かれすることなく湾曲する坂道。この坂道に対する建築を以下のように変える。

- ①既存の家が作るヘタ地と同様なスケールのヘタ地を外部につくる
- ②角度がついたボリュームにより内部空間にもヘタ地をつくる

建築の内外の空間にヘタ地のような不整形をつくりだすことで居場所としての移動空間を提案する。
外部⇄内部⇄外部と連続していくように考えた。



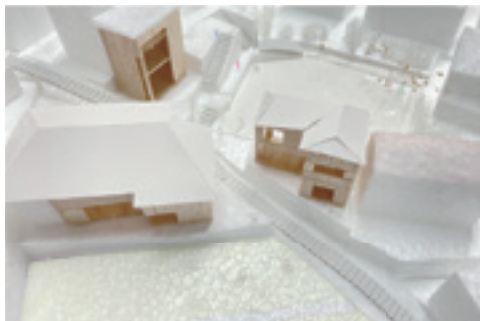
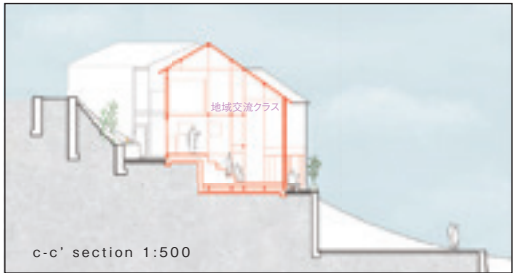
丘の書庫

何度も枝分かれする坂道。この坂道に対するすでに建っている建築を以下のように変える。

- ①枝分かれする道が作り出すヘタ地を活かすプラン
- ②2つのGLを持つ既存住宅を動線として開放

今まで閉鎖的だった家が坂に開かれることで、他の家々の建ち方も変えていく。

—— リノベーション部分

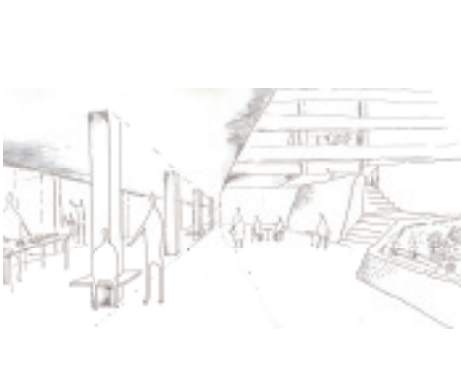


マーケット

マンションの共用廊下が坂として頂上まで開放されている。途中には踊り場などがあり、面する住居の平面や機能を変える。

- ①セットバックさせて、踊り場を拡張
- ②踊り場に面した室はチャレンジショップに改修

階段の一部を公共化しているということを最大化することで、入ってくるプログラムも変えていく。



坂を登る風景



坂を登りながら中のアクティビティが見えてくる

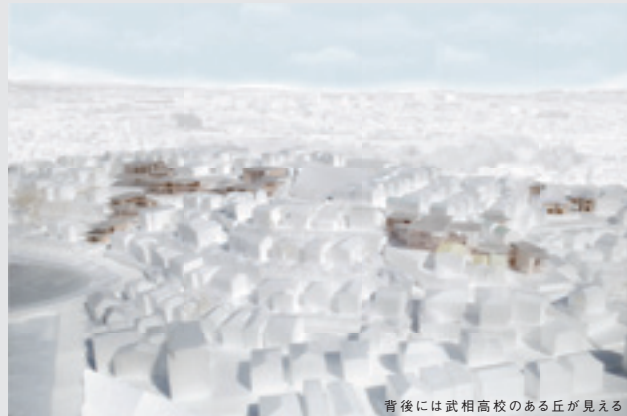


坂を挟んでアクティビティが繋がる

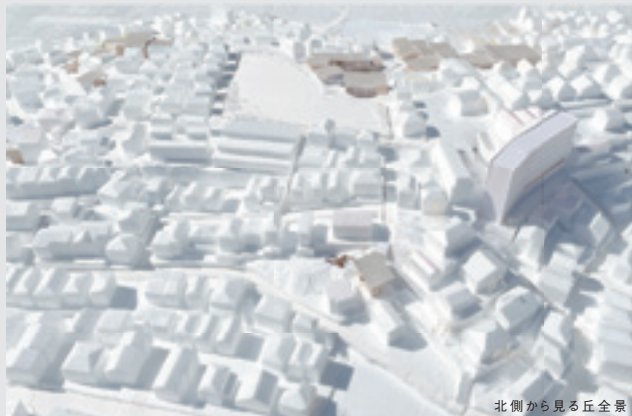


建築の境界が曖昧になっていく

丘の全体写真



背後には武相高校のある丘が見える



北側から見る丘全景

Comments from Classmates

丘という大きな地形の中の、コモنزとしての狭隘道路、さらにその中のヘタ地という小さなところに対する興味から丘全体に提案を広げていったのが良かったと思う。ひとつの場面から建築全体を考えるというのが太朗らしいと思った。

木幡羅

マテリアルすてき太郎。太郎のダイアグラムを海とか島に例えて一緒に考えたのはいい思い出です。太郎が魅力と捉える横浜の斜面地での暮らしには私も共感します。卒制では一つの丘にフューチャーしていただけど、いつかいろんな丘が色をもつ大きな案も見たいです。そのときまた一緒にダイアグラム考えよう。

阿部ほなみ

講評の時にタロウの図面からは建築的知性を感じるって言われてたけどほんとにその通りだと思います。卒制に限らず図面の書き込みとか表現とか細かなところまで、シンプルだけど綺麗でタロウの作る建築いいなってずっと思ってます！あとタロウにエスキスしてもらうといい方向に進むことが多かったです。助けてくれてありがとう！Y-GSAで輝いてください！！

東野有希

図面にささやかなうまさがある建築。ヘタ地と平らな屋根面の調和が取れた作品。平面図のみでみると、あまりに部分部分から設計しすぎているように見え、始めはもっと全体性や一貫性がある良いのではないか、建築としての強度が足りないのではないかと正直始めは思ったが、それがむしろ丘に無理矢理乗りかかる雑な住宅群とマッチするのではと感じるようになった。模型、断面含め応えがありました。

上山源喜

全て終わったあとに学棟で模型を近くで見て良いと思った。きめ細やかに魅力的な空間をつくっていく空間に長けていて、人が歩く坂とヘタ地という小さなものに着目していくのは太郎の強みを上手く活かした良い卒制だったと思う。ただそれを説明していくときに「敷地境界がなくなる」とか「内部と外部が曖昧になる」とか建築学科っぽい言葉じゃなくて、人の行動がどうなるかを生々しく描いた方が伝わるのかもしれない。その具体性に耐えられる力のある建築になりつつあると思います。

石川泰成

いいテーマを持って取り組んでいたと思う。自分の興味を深く掘り下げ探求する姿は素直に尊敬する。一方で個人的な見解だけでなく、誰かに共感してもらような、人に訴えかけるような提案がなされていたらこの壮大なテーマと設計が合致していたのかもしれないと思う。またタローの人物として、おあらかじめ同調しすぎることなく正面から議論できるところはとても尊敬しているし、一緒にやっている中で何度もそれに救われた気がする。そう考えるとタローはあまりヘコヘコせずもっとオウについて自己中心的な感性を爆発させてもいいのかもしれない。兎に角タローの今後の変化を楽しみにしている。

上田成夢

たろうは、些細な丘の魅力や気付きから卒業設計を広げて提案してっていて、たろうらしいなと思いました。私も横浜の地形が面白くて好きなので、設計楽しそうだなと思いながら見ていました。閉じられた家ではなく、丘全体が家のように感じたり、丘に住むことにアイデンティティを感じたりするような暮らしを目指した事は、なんとなくみんな持っているここは家ではないけど、家みたい感を扱うという点でとても共感しました。坂を登り出したら我が家という題名も目指す先がすぐわかる言葉で、とてもいいなと思いました。設計のところがそれぞれ坂として、とても良い空間そうだなと思いながら、丘全体として我が家となるような設計をするのは難しそうだなと思いました。

上山信

万平からテーマも敷地も変えずに取り組んで煮え切っちゃった仲間であり、エスキス仲間なので…何とも言えないのですが、いろんな意味で共感します。要点をつかむこととか、客観視して考えることとかそのへんが不器用でよくわからない建築になってしまうんだけど、信じてることに嘘はないし、ずっと耳に入る言葉は頻繁に生み出してるのが真直ぐでいいなあと思います。色んな意味でたろうらしい！あと、本人のプロジェクトでは不器用なのに、他の人のプロジェクトだと要点をしっかりとつかんでるな…と一緒にエスキスを受けていて思いました！これからがんばろう…！！

寺西遥夏

藤澤の建築に取り組む姿を見ていると、私自身に振り返って奮起することがある。建築家の良い図面を横において構法を理解しながら図面を引く姿や、丁寧に判断を重ねて作られる模型などを見ているとその思考の緻密さをひしひしと感じる。きつものづくりや手を動かすことが好きな人のだろうと自分自身と重ねて嬉しくなる。ただその反面、手元に気を取られすぎて思考のスケールを見失っている時がある。植民地の国境線のように味気ない敷地の境界線を丘の輪郭にするというテーマは非常に魅力的で藤澤らしい温かいものであった。しかしヘタ地、堀や階段などの建築未達の構築物に気を取られすぎてしまい、丘全体、また横浜全体を見渡すスケールが最後までなかったように思った。また、手元にあるスケールは思考の末端であるため、それが設計の鍵を握ってしまうと、大きな思考の軌道修正が後に困難になる。梗概ではそこを取り繕うための言葉に自分自身が振り回されているように感じた。必死に図面を引く藤澤と、天井に張り付いてそれをみている藤澤がいるといいのと思う。

宮本皓章